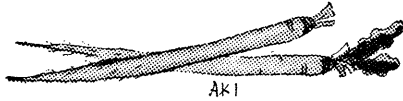


四才児の器樂指導



堀 合 文 子

六月研究協議会に指導した記録より抜粋いたしますので、四才児といっても私の組編成は二十二名の新入園児と、十五名の一年経験してきた幼児との三十七名の組で考えてみましょう。

十五名の前年一年間には、ハンドカスタを音楽にあわせて叩けるようにとの目的で指導したのみでまだまだ三才児なので本格的な器樂指導とはゆかず、道具の一つとして使用した程度であったから新入園児と共に指導をはじめました。

○知っている歌や音楽にあわせて拍手をする。

これは一番、基礎の事で器樂指導のみに限らない事ですが、器樂指導には特に大切に拍手する事が或程度簡単なりズムもできるようにならないと器樂は与えられないと考えてもよいでしょう。器樂を与える前に充分拍手でたのしく遊ぶ事が必要でしょう。

(自由に叩く。)

(先生と一しょに同じように叩く。)

○ハンドカスタを与える。

拍手ばかりでできていてもおもしろみが薄くなってくるから或程度拍手ができるようになるとハンドカスタを与える。勿論はじめは持ち方叩き方は正しく指導する。が、ゴムの加減とか興味によっては持ち方もくずれてくるから時折訂正し、指導する程度で、持ち方が違う度に注意しては器樂遊びに対する興味がなくなるので或程度は自由に使わせる。

(自由に叩く。)

(その友だちの中より一つの叩き方を取上げて皆でそれと同じに叩く。)

(先生と同じように叩く。)

(二拍子、四拍子、を強弱なしで叩く。)

(ゆっくり。早く。叩く。)

(早い時はくぼみ打を使う。)

(二組に分けて、交互に叩く。)

○動きにハンドカスタを使う。

大人のように座ったまま或時間を過すことは幼児にはむずかしい。幼児の楽しさを増すため、自発的に参加させるには動きと共に考える事が大切である。歩きながらや動きの中に入れる事は相当むずかしいので、四才児のこの程度では歩く時に入れる位であらう。

(曲にあわせて歩きながら自由に叩く。)

(曲にあわせて叩いたり、やめたりを交互にする。)

(曲にあわせて先生の合図どおり叩く。これは簡単な合図で、歩いている時は叩かなく、止る時叩くなどこのようにして合図により変える。)

(動きのリズムの中で例えば、かわいいことりの時ことりのくちばしにするなど簡単な表現をさせる。)

○タンバリンを入れる。

ハンドカスタも大分使えるようになったのでタンバリンを入れてみる。ハンドカスタ

時のように正しい使い方を話し、交代して使用してみる。

○ハンドカスタとタンバリンを交互に組合わせる。

○鈴を入れる。

タンバリンも或程度使いこなせるようになったら鈴も入れる。がその時の進度をよくみてこれを加える事が必要で、五才になってからでもよい。

以上のような指導過程であるが、私の現在の担任幼児においてこれであるので、その時の幼児によっては無理に次々と楽器を新しく入れる必要はないと思う。

したがって、一組の幼児がハンドカスタでもタンバリンでも一応使いこなせる事がより大切で、特定の幼児のみ使用するのでない事は忘れないようにしたいものです。

楽器指導はともすると、皆一緒にそして揃わねば出来なく又効果のない遊びであるの

で、練習を積むようなきらいがあるが、幼稚園の楽器指導は、幼児の遊びの一つとして生活の中に打ち込み、将来幼児が自身で楽器を楽しみ、又同時にリズム指導にもなるように指導しなければならぬと思います。

四才児は一番の基礎ともなるでしょう。楽しく扱う、楽しく遊ぶこの二つをこの四才児の時に味わわせ将来、協力して楽隊あそびへ誘導できるようにしておきたいと思ひます。

三才児一年経過してきた幼児は、三才の時 は単なる遊具の一つとして指導し、扱ってきただけですがはじめは四才新入園児と同じで今ともなるとやはり新入園児のリードをしている事を見ると、何かほほえましい気持になります。新しい人たちもこの人たちに追いつき五才児になっての楽隊あそびを今からの楽しみにしております。

(お茶の水大幼稚園)